A キャリア教育についての理解

キャリア教育は、新しいものではありません。今まで培ってきた教育活動の中に、その「思い」や「要素」がちりばめられています。その「思い」や「要素」を、キャリア教育の視点でより効果的な取組みとなるように紡ぎなおし、子どもたちにとってよりよい学びの環境を生み出すことが大切です。

もしも「キャリア教育」の理解が十分でなければ、めざす方向や取組みの内容にも大きく影響してきます。キャリア教育について正しく理解をすることが取組みを進める上での第一歩であり、大きな基盤になります。まずは管理職や担当者等から理解を深め、更に研修等を通じて教職員全体で共有していくことが大切です。

キャリア教育についての理解を深める方法としては、研修の他、教職員用の通信の発行や、教職員どうしの交流などがあげられます。多様な方法を組み合わせることで、より効果的に理解を進めることができます。

「キャリア教育」についての理解を広げるプロセス例

A. 研修の実施

- キャリア教育の専門家等を招き、研修を行う。
- キャリア教育に関する教育活動を整理するワークショップ（キャリア教育で育む力につながる教育活動を洗い出ししてまとめる等）

B. 通信等の配付

- キャリア教育に関する情報をまとめた通信を定期的に発行・配付する。

C. インタビュー、授業観察とフィードバック

- キャリア教育に詳しい担当者（校内のキャリア担当者や外部支援人材等）が各教員にインタビュー（どんな思いで、どんな教育活動をしているか等）を行うことで、教職員の気付きを促す。
- 授業観察を通して、どんなキャリア教育の要素が入っていたか、第三者的視点から客観的にフィードバックする。

キャリア教育と様々な教育活動とのつながり【参考：国立教育政策研究所「キャリア教育のススメ」】

キャリアの視点をもって取り組むことによって、それぞれの教育活動を「キャリア教育」につなぐことができます。まずは身近で取り組みやすいことから始めてみましょう。

教　科	学校生活	道　徳	特別活動	総合的な学習の時間
教科で学ぶことが将来や社会とどのようにつながるのか実感できるような要素をとり入れる（例：実社会の現象やヒット商品等とのつながりを取り入れた授業等）	自らの役割を自覚し、協力しながら、責任をもって取組む要素を取り入れる（例：係活動、日直、清掃等）	人間としての生き方についての自覚を深めるような要素を取り入れる（例：自己理解・他者理解を促す授業等）	コミュニケーションやチームワークの要素を取り入れる（例：学級活動、児童会・生徒会、学校行事等）	自らの生活・行動について考えたり、探究的に学び、課題解決に向けて取り組む要素を入れる（例：ボランティア活動、職場体験等）
▼	▼	▼	▼	▼
学習への興味関心や目的意識の向上	**生活上の役割を果たす責任感や連帯感を育てる**	**自己の生き方についての自覚を深める**	**よりよい人間関係を築く力を育む**	**主体性や課題解決力を育む**

キャリア教育サポーターからのレポート **1**

八尾市立志紀中学校区

小中合同の研修で キャリア教育への理解を深める

志紀中学校区は児童生徒の人数も、教職員の人数も多い一小一中の校区で、日常的に小中学校間の連携を図っている中で、小中合同のキャリア教育研修を実施した。

校種の違いによるとらえ方のギャップが生じないように、あらかじめ小中合同のグループを作り、研修を展開した。日常的に連携していることにより、キャリア教育の概念についての講義を交えつつ、効果的に参加型のワークショップが実施できた。

小中学校でキャリア教育を推進するにあたり、子どもが20歳頃になった時の状態を考え、「めざすハタチ像」という共通の目標を掲げ、お互いの意見を出し合った。

研修を実施するまでは、教職員の認識として、「キャリア教育」=「職業教育」というイメージが強く、特に自分が確立していない小学校低学年では、自己実現を目指すキャリア教育はそぐわないという考えもあったものの、研修を通して、「キャリア教育は難しいものではなく、すべての教育活動に通じるものだ」という認識が広がり、キャリア教育における小中連携の重要性を再認識することができた。

教職員の声

- キャリア教育が将来の「めざす姿」のイメージを大切にして進めるものだということが分かりました。
- （研修を受ける以前は）「キャリア教育」=「進路学習に近いもの」というイメージがあったけれど、もっと大きくとらえるものだと考えるようになった。
- キャリア教育を表面的にしか考えられていなかったのではないかと感じることができた。今日の研修で興味も湧いたので、少し勉強してみたいと思います。

サポーターの支援例

- 学校の現状をインタビューや授業見学で把握。
- 研修内容を企画、提案、実施。研修に必要な書類や備品の準備、小中の交流が図れるようなグループ分けなどを支援。
- アンケートを実施し、研修の成果について通信などを通じて報告。

サポーターの声

本事業以外にも、小中連携を進めるパートナーシップ事業や、「学力向上」に関わるさまざまな取組みに全教職員が向き合っている姿勢がすばらしいと感じました。

キャリア教育サポーターからのレポート **2**

岸和田市立山滝中学校区

フィードバックなどを通して、 すでにあるキャリア教育の取組みを再確認する

各校が「キャリア教育」と認識して行ってきた活動として、「赤い羽根募金に関する活動」や「防災のワークショップ」、「舞台芸術鑑賞」など、多数の取組みがあった。また、校区内の学校間でも、取組みの進捗に差がある。

キャリア教育サポーターが、授業見学などをする中で、日常の授業や学校生活の中にも、「挨拶」や「プレゼンテーション」など、様々なキャリア教育の要素が入っていることに気づき、キャリア教育の推進を図ることができた。このように授業見学後のフィードバック等を通して、既存の活動の中に入っていたキャリア教育の断片に気づき、キャリア教育の推進を改めて確認することができた。また、既に取組みを始めているキャリア教育についても、更に深化させることができた。この流れを受け、中学校区内の3校が共通の「めざす子ども像」をつくることになり、校区内の3校が協力して取り組む基盤づくりにつながった。

教職員の声

- キャリア教育について学んでみると、普段の授業の中でキャリア教育を実践していることがわかりました。
- 授業の中に、すでにあるグループワークや作品発表もキャリア教育につながると知り、取り組みやすく感じました。

サポーターの支援例

- 学校や教職員が取り組まれていることの現状を、教職員へのインタビューや授業見学で把握。
- インタビューや授業見学を通してキャリア教育の視点を伝える。
- 教職員の取組みをサポートする。
- キャリア教育の情報提供・提案。キャリア教育の事例紹介、研修案内。

サポーターの声

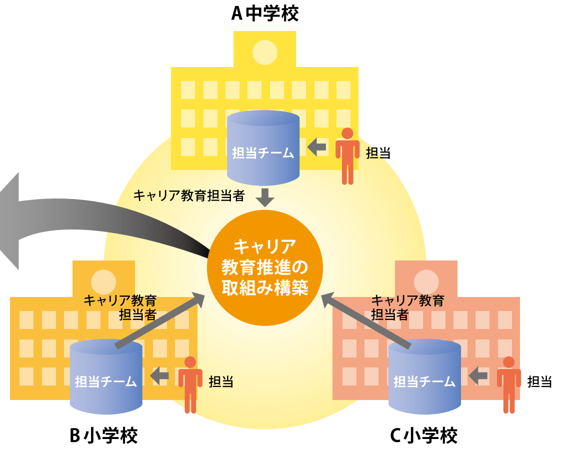
先生方が、真摯にキャリア教育に関心を持ち、子どもたち一人ひとりに言葉をかけ、良いところを引き出す等、日々の教育活動を大切にされていました。今後も、校区全体で継続的に取り組んでいただきたいと思います。

B 推進体制づくり

　キャリア教育を効果的に進めるためには、キャリア教育の担当者を明確にすることが重要です。まずは各学校で「担当者」を決め、次に校内での「キャリア教育推進チーム」をつくります。さらに、中学校区内の各校のキャリア教育担当者が集まってキャリア教育を推進する体制ができると、地域が一体となってキャリア教育を進めることができます。

　キャリア教育の担当者をただちに位置付けるのが難しい場合は、既存の校務分掌（例えば校種間連携担当、首席・指導教諭など）を活用してもよいでしょう。キャリア教育が継続・発展していくために必要な推進体制を各地域・各校の実情に合った形で構築し、検証・改善をしていくことが重要です。

キャリア教育推進体制例



キャリア教育担当チームの役割例

- キャリア教育についての情報収集・整理
- キャリア教育に関連する研修の日程調整や企画・実践
- キャリア教育推進のための体制作り、校内や他校との連絡調整
- キャリア教育の計画づくり、検証・改善

いろいろな
先生が主役！

中学校区キャリア教育推進体制表（例）

■スキルチーフ　：つけたい力ごとの取りまとめ役
●ステージチーフ　：ステージごとの取りまとめ役
太字は学年チーフ　：学年ごとの取りまとめ役
校内の校務分掌を考慮して分担を決定する。

各校担当	い小学校：○先生	ろ小学校：△先生	中学校：□先生

ステージ	小1～4（い小学校長）				小5・6&中1（ろ小学校長）			中2・3（中学校長）	
学年	小1	小2	小3	小4	小5	小6	中1	中2	中3
きめる	A先生（い小）	H先生（い小） I先生（ろ小）	O先生（ろ小）	**V先生（ろ小）**	**AC先生（い小）**	AJ先生（い小） AK先生（ろ小）	BA先生	■**BF先生**	BK先生
わかる	B先生（ろ小）	J先生（い小） K先生（ろ小）	**P先生（い小）** Q先生（ろ小）	●**W先生（い小）** X先生（ろ小）	AD先生（ろ小）	**AL先生（ろ小）**	■**BB先生**	BG先生	BL先生
えがく	C先生（ろ小）	**L先生（い小）**	■**R先生（ろ小）** S先生（い小）	Y先生（い小） Z先生（ろ小）	AE先生（い小）	AM先生（い小）	**BC先生**	BH先生	BM先生
つながる	D先生（い小） ■**E先生（ろ小）**	M先生（ろ小）	T先生（ろ小）	AA先生（い小）	AF先生（い小） ●**AG先生（ろ小）**	AN先生（い小） AO先生（ろ小）	BD先生	**BI先生**	BN先生
チャレンジ	F先生（い小） G先生（ろ小）	■**N先生（ろ小）**	U先生（い小）	AB先生（ろ小）	AH先生（い小） AI先生（ろ小）	AP先生（い小）	BE先生	●**BJ先生**	**BO先生**

チーフの数	1	2	2	2	2	1	2	3	1
い小学校	0	1	1	1	1				
ろ小学校	1	1	1	1	1	1			
中学校							2	3	1

「わかる」という能力について話し合うときに集まる。
■**BB先生**が取りまとめ役。

「小1～4」というステージで話し合うときに集まる。
●**W先生（い小）**が取りまとめ役。い小学校長から指導助言。

「小6」というステージで話し合うときに集まる。（主に小小連携など）
AL先生（ろ小）が取りまとめ役。

キャリア教育推進体制づくりのプロセス例

1. 各校でキャリア教育担当者を決め、校内での推進体制をつくる。
2. 中学校区の管理職やキャリア教育担当者等が協議し、校区内のキャリア教育推進方針を立てる。
3. 中学校区単位での、キャリア教育推進のためのチーム体制をつくり、キャリア教育を推進するための計画を立て、実行し、検証・改善していく。

キャリア教育サポーターからのレポート
3

豊中市立第九中学校区

推進体制づくりの一歩として、校区の教職員どうしが思いを分かち合う場づくり

本校区は市のキャリア教育推進事業のモデル校区となり、市教育委員会と連携しながら校長のリーダーシップのもと、キャリア教育を継続的に推進するための体制づくりを行っていた。また、校区の教職員どうしが、それぞれの取組みの現状や思いについて意見交換する機会を充実するため、ワークショップ研修を通じて教職員どうしの意見交換・思いの共有をはかった。

研修では、「校区での小中連携」という方向性をもとに、教職員が日頃感じている「子どもの様子」や取り組みについて率直に意見を出し合う場作りを大事にするため、アイスブレイク（※1）を取り入れた。また、ＫＪ法（※2）を用いて教職員一人一人の意見が反映される工夫をすることにより、有意義に意見交換でき、「中学校区として子どもを育む」視点を実感できた。次年度は、校区の全教職員で「校区でめざす子ども像」について話し合う場づくりを予定している。

教職員の声

- 学校、家庭、地域の三位一体で子どもを育むこと、小中連携の必要性を実感しました。

サポーターの支援例

- 各校に入って、現状のキャリア教育の取組みや推進体制の把握、及び教職員の声や取り組みについてインタビュー実施。
- キャリア教育を行う意義や目的、必要性を各校へ伝達。
- ワークショップ研修当日には支援員として実施支援。
- 研修結果を各校へ報告、今後の推進体制づくりについて提案。

サポーターの声

教職員の方々がとても熱心に子どもたちと向き合っておられ、その姿からたくさん学ばせていただきました。また、外部との連携や体験型の授業が多く、様々な学びの環境づくりを行っておられるので、今後も小中連携を大切にしながら取組みを続けてほしいと思います。

※1：緊張をほぐして、参加者どうしがうちとけるためのゲーム
※2：アイデアを整理し、問題解決に結びつけていくための方法

キャリア教育サポーターからのレポート
4

守口市立梶中学校区

既存の「小・中連携推進会議」を活用し、中学校区のキャリア教育推進体制を検討

中学校区全体の「キャリア教育」の認知度は高くはないのが実情だったため、校種間でキャリア教育を推進するための窓口をどうするかということが当初の課題だった。一方、市全体の取組みや中学校区の独自の取組み、教科活動などの中で学校間・校種間・校務間の連携・協議体制は十分に存在していた。

「キャリア教育」という視点で、小中学校間の教育活動をつなげていくための仕組みをどのように作っていくかということを協議していく中で、各学校の首席などが参加する「小・中連携推進会議」の場を活用することとした。そこに、中学校の教務担当者が参加し、中学校区のキャリア教育を推進していくために、現時点で「何が必要か」「まず、最初に打つ方策は何か」などを、それぞれの学校の状況や取組みなど意見交換した上で、合同の研修会の日程調整や今後についての協議体制などを話し合うことができた。この会議が中学校区の「キャリア教育推進体制」を構築する上での準備委員会の役割を果たした。

教職員の声

- 従来から行ってきた小中連携のための会議が、9年間を通じてのキャリア教育を推進する場としてふさわしいことに気付いた。

サポーターの支援例

- 中学校区のキャリア教育を推進するための準備委員会として機能していた会議に、サポーターが入り、各校のキャリア教育の認識や推進体制の有無、現状等、具体的なニーズを抽出するとともに、教職員研修を効果的なものにするためその企画・立案に関わって下記のような支援を行った。
- 「キャリア教育」に関する情報提供。
- 「めざす子ども像」を作成するためのワークショップの紹介。
- 他市町村のキャリア教育の実践事例の紹介。

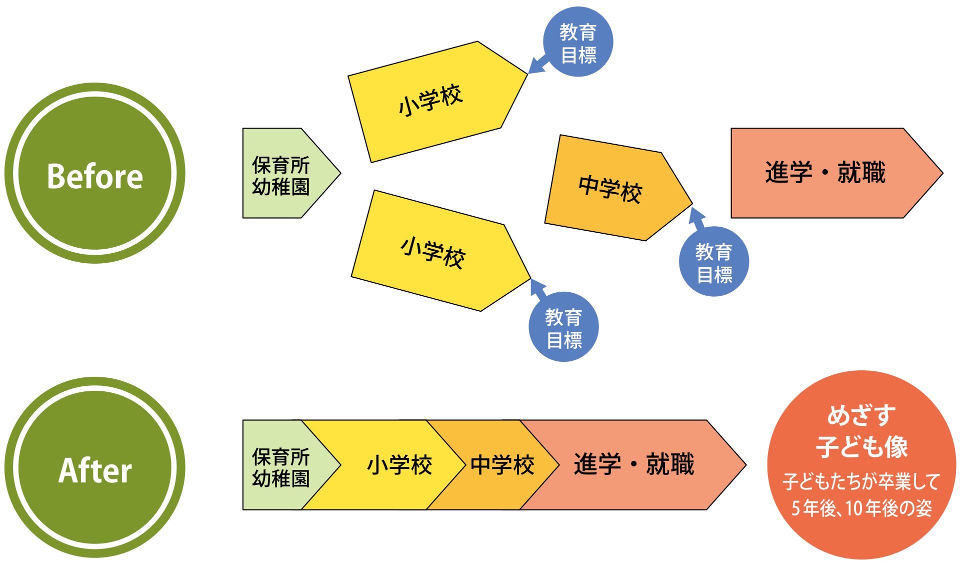
サポーターの声

既存の連携体制をいかに今後につなげ、中学校区の教育活動をより良いものにしていくかということを真剣に考えておられ、児童生徒にとって「良いもの」は何としてでも取り入れたいという教職員の方々の探究心と情熱を感じました。

C「めざす子ども像」の共有

キャリア教育を効果的に進めるためには、一部の関係者（管理職・教職員等）だけが協議するのではなく、地域（中学校区等）の子どもたちの成長に関わる者全員が、十分にコミュニケーションをとって課題意識を共有した上で、「めざす子ども像（子どもがどのように育ってほしいかのイメージ）」を一緒に作成するプロセスが大切です。

そうしてできあがった「めざす子ども像」は、あらゆる教育活動のもとになるものです。教職員はもちろんのこと、子どもや保護者とともに「めざす子ども像」を共有できるようにしましょう。また、子どもを取り巻く状況は、社会情勢や環境等の変化に伴い変わるものです。それをふまえ、「めざす子ども像」も、定期的に見直す必要があります。どれくらいの期間で、だれがどのように見直しの取組みを進めるのか、改善・継承の仕組みをつくっておくことも重要です。



「めざす子ども像」作成のプロセス例

※あらかじめ、同じ中学校区の小中合同のグループをつくっておく。

1. 全体

(1)「めざす子ども像」の意義・目的についての共通理解醸成

なんのために「めざす子ども像」を考えるのか、その意義や目的について全参加者が共通理解をもてるようにする。

2. グループワーク

(1)「子どもの現状」について意見交換・まとめ

気になる子どもの様子等について付箋を使って意見を出し合い、出てきた意見を整理する。

(2)「子どもの背景」について意見交換・まとめ

気になる様子の子どもの背景等について付箋を使って意見を出し合い、出てきた意見を整理する。

(3)「めざす子ども像」について意見を出し合う。

子どもたちが卒業して5年後、10年後の姿をイメージして、子どもがどんな様子・状態になっているのをめざすのか意見を出し合って整理する。

※必要に応じて、(1)～(3) の間に、グループごとの発表・共有の時間を設定する。

3. 全体

各グループがまとめた「めざす子ども像」を発表しあい、全体として一つにまとめる。

詳細な流れ・内容は、巻末資料（p19）をご参照ください。

「めざす子ども像」づくりのポイント

❶ 子どもが成人したときのイメージを描く

「めざす子ども像」という言葉から、小学校や中学校卒業時点の子ども像をイメージしがちですが、キャリア教育の目的は「社会的・職業的自立」であることからもわかるように、子どもが卒業して5年後、10年後になったときのイメージを描いて、中学校区など地域の関係者全員が共有することが大切です。

❷ 早めの計画・日程調整

中学校区共通の「めざす子ども像」を効果的・効率的につくるには、校区内の全校・全教職員がワークショップ（目安：2時間以上）に参加することが必要です。年度途中にこのような研修の計画を立てても、調整が困難な場合が多く見受けられます。次年度の計画を早めに立て、校区内の全校・全教職員が一同に会することができるよう調整をしましょう。

❸ 初対面の参加者どうしも話しやすい場づくり

同じ校区内とは言っても、普段顔を合わすことのない初対面の人どうしが交流する場合、お互いの緊張を解き、自由に意見が言い合えるような場づくりをすることが大切です。自己紹介やアイスブレーキングなどを取り入れ、話しやすい場づくりをしましょう。

キャリア教育サポーターからのレポート
5

泉南市立泉南中学校区

「めざす子ども像」づくりプロセスを通して方向性の共有

泉南中学校区は人権教育を柱に、保幼小中連携の具体的な取組みを進めてきた。各学校が子どもの課題に向けてさまざまな取組みをしているにもかかわらず、学校・学年での取組みの共有や連携が十分でないため、中学校区としての全体的な取組みのつながりが見えにくくなっていた。

日々関わっている子どもたちの現状や課題と感じること、各学校での取組みについて、全教職員で共有する機会が少なかったため、「めざす子ども像づくりワークショップ」を通して教職員の共通認識を図った。ワークショップを通して、改めて子どもの背景・課題を共有し、「めざす子ども像」について話し合うことで全教職員の方向性を再確認するきっかけとなった。

ワークショップでは、ゆくゆくは中学校区として共通の「めざす子ども像」を作っていくことを念頭に、まずは各学校内での共通認識や、意見を出し合う環境づくりを大事にした。教職員が安心感のある中で話し合える雰囲気を作るため、ワークの前にアイスブレイクを取り入れ、ワークでは教職員が一つ一つの意見について話し合えるようＫＪ法を用いた。研修を通して全教職員でめざしていく方向を共有することができ、学校単位だけでなく中学校区としての視点を持つ大切さや、キャリア教育の視点を持つ意義を再確認できた。

教職員の声

- 交流することでベクトルが同じ方向に向いていくのだなと思った。
- 保幼小中が連携して作成した「めざす子ども像」等を共有することが重要とは今まで考えていなかった。
- 「キャリア教育は小学校であまり関係がないのかな？」と思っていましたが、今日の研修で小中学校が基礎になっていると知りました。
- 毎日自分の仕事でいっぱいいっぱいで、他の学年に目を向ける時間もない中、子どもの実態を聞き、「一緒だなぁ。」「同じところに課題があるなぁ。」など感じることができた。

サポーターの支援例

- 校種間の連携・教職員の連携や認識を授業見学やインタビューで把握。
- 研修日程の調整、研修内容の提案・実施。
- 研修成果を報告。

サポーターの声

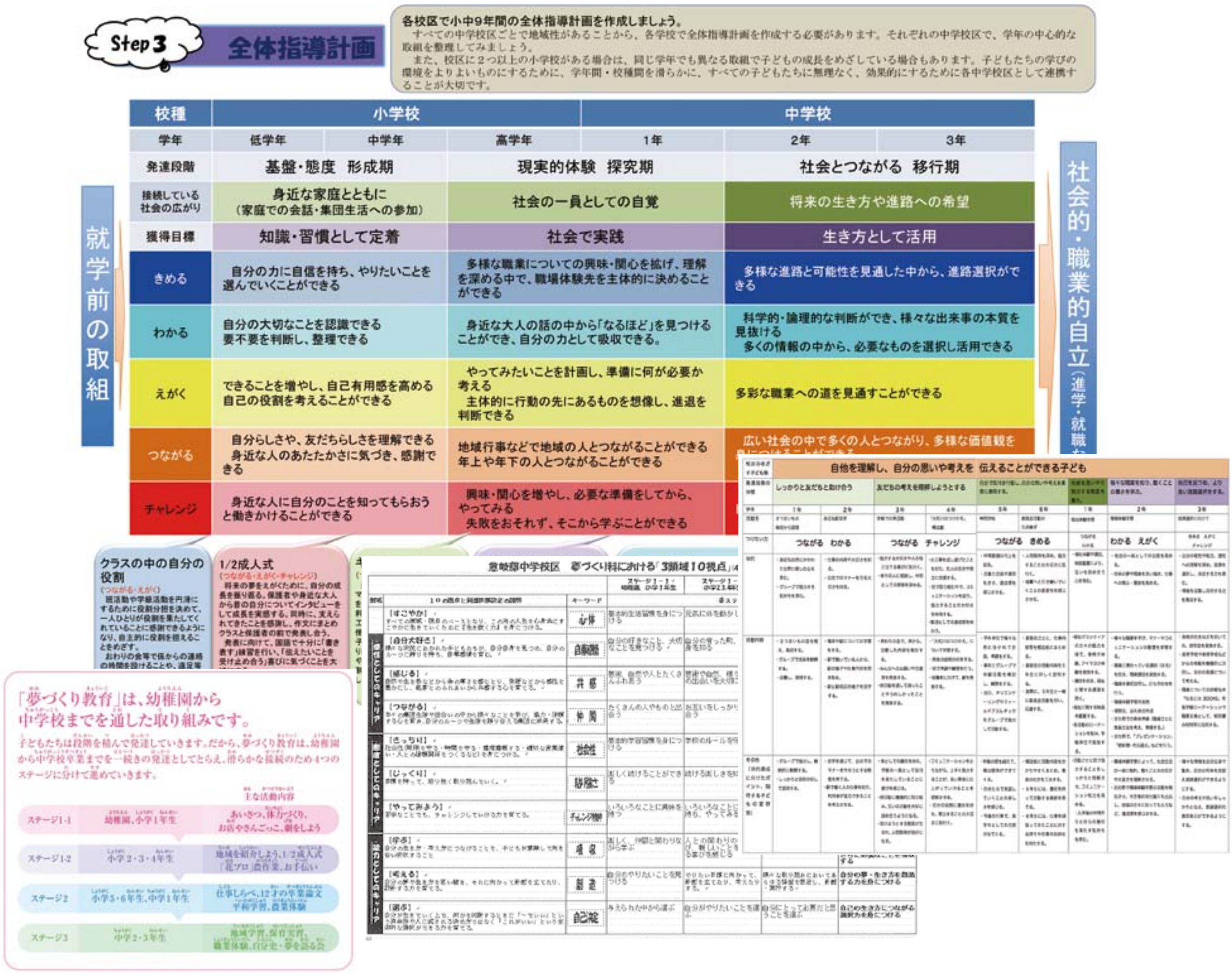
泉南中学校区の教職員の方々は子どもたちが直面するさまざまな課題に対して、真正面から向き合い、動かれています。日々の取組みがより具体的につながり、線となり面となっていく中で、子どもたちにとって、より強い人生の基盤となることを確信しています。

D キャリア教育全体指導計画の作成

キャリア教育を効果的に進めるためには、地域（中学校区等）の教職員が連携して、全体指導計画をつくることが大切です。全体指導計画とは、「めざす子ども像」と「育みたい力」の実現に向けて、児童生徒の発達段階ごとに、どのような目標でどのような取組みを行うのかをまとめた計画です。

全体指導計画の作成にあたっては、まずは、それぞれの地域で「めざす子ども像」につながる中心的な取組みを整理してみましょう。校区に2つ以上の小学校がある場合は、同じ学年でも異なる取組みで子どもの成長をめざしている場合があります。子どもたちの学びの環境をよりよいものにするために、学年間・校種間の接続を滑らかに、すべての子どもたちに無理なく、効果的な学びの場をつくるために、教職員と教職員、学校と学校が連携して、共通の計画をまとめ、実行していく必要があります。

全体指導計画例



「全体指導計画」作成のプロセス例

※あらかじめ、同じ中学校区の小中合同のグループをつくっておく。

❶ 子どもが社会的・職業的自立を迎える時期をイメージし、どんな力をつけたいか考える。
❷「つけたい力」に関連する教育活動を整理する。
❸ 発達段階のステージ（例：①小学校低学年・中学年、②小学校高学年・中学1年生、③中学2・3年生等）ごとに獲得目標を考える。

▶ 詳細な流れ・内容は、巻末資料（p20）をご参照ください。

キャリア教育サポーターからのレポート 6

大阪狭山市立南中学校区
小中合同のワークショップを通じて小中連携の重要性を再認識し、9年間にわたる取組みを整理

「めざす子ども像」づくりの研修を各校で実施し、中学校区での「めざす子ども像」ができていたが、「めざす子ども像」実現に向けての具体的な取組みを進めるため、全体指導計画を作成に向けての研修を実施することになった。

まず、学年や学校を超えて、キャリア教育に関連する取組みを整理し、発達段階に応じて「子どもにつけたい力」として5つの視点からの目標を考えるという流れでワークショップを行った。話しやすい雰囲気の中で、教職員どうしが意見交換・情報共有する事により、今後の取組みを深く考え、もっと子どもたちに効果的な学びの環境をつくっていきたいとの意識が高まり、小中連携の重要性を再確認する研修となった。このようなワークショップの結果は、通信を通じて、関係する全教職員に発信された。

教職員の声

- 小学校での取組みが中学校でも生かされるように段階を踏んで系統だてた計画を立案していく事が大事だと思った。
- 学年で取り組んだ内容の見直しや分類をすることで再認識できるのが良かった。
- 他校の先生方とお話できる機会があまりないので、こんな場があって良かったです。（同じ中学校区の）４校で子どもたちを育てていくスタンスがうれしい。

サポーターの支援例

- キャリア教育に関する情報提供。
- 研修のスケジュール調整、企画、実践支援。
- 研修結果等をサポーター通信で発信・共有。

サポーターの声

教職員のみなさんが積極的で、チームワークがすばらしいと思いました。子どもたちの学びの環境をよくするための取組みを今後も続けてほしいと思います。

キャリア教育サポーターからのレポート 7

東大阪市立意岐部中学校区
キャリアの視点からのカリキュラム再構築

①「キャリア教育」に関する取組みを小中９年間の中心的学習活動として再構築し、カリキュラムを作成。

「総合的な学習の時間」「特別活動」「道徳」「各教科」に分散して実施していた「つけたい力」「生きる力」の教育内容を、キャリア教育の視点から再構築し、「夢づくり教育」として一貫した体系に位置づけてカリキュラムを作り、小中9年間の学習活動における中心的な学習活動として実施した。

②幼稚園から中学校卒業までを一続きの発達と捉え、ステージごとに具体的な「つけたい力」を考案。

幼稚園から小学校、小学校から中学校へと進級していく過程での段差を少しでも小さくしていくために、中学校区全体の共通認識として、校種や学年の垣根を外し、発達段階ごとのステージに分け、それぞれの具体的な「つけたい力」を考えた。

教職員の声

- 教職員みんなが力を合わせて全体指導計画を作り上げたことが、教職員の「キャリア教育を推進しよう」という共通の意識をつくることにつながった。

サポーターの支援例

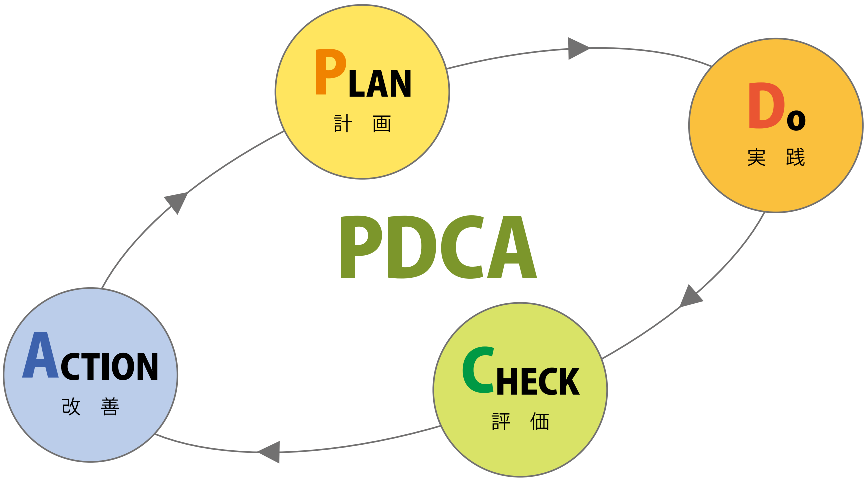
- 教職員間や校種間の連絡・調整、情報共有を行うキャリア教育担当教員のサポート。
- 内外に対しての情報発信のための通信づくりなどの広報や情報の整理などを担うことで、多忙な学校現場における教職員の業務を補佐。

サポーターの声

これまでの教育活動の積み重ねから、どれだけ取組みの形ができあがっていても「常に今のままではいけない」という教職員の意識が中学校区全体から感じられ、改善・改革へのエネルギーに感動しました。

E 検証・改善・継続

　キャリア教育を効果的に進め、継続・改善していくためには、あらかじめ立てた計画に照らし合わせて、検証・改善していくことが大切です。うまくいった場合はなにが成功の要因だったのか、それを次にどのようにつなげるか、うまくいかなかった場合はその原因を分析し、改善するための方策を考える必要があります。こういった検証を定期的行い、PDCA（Plan 計画→Do 実践→Check 評価→Action 改善）のサイクルを機能させることが大切です。
　また、次年度に担当者が変わるなどのこともあることから、前任者から後任者にどのように引き継ぐか、その情報共有の仕組みなど、継承の仕組みをつくって実行していくことも重要です。



キャリア教育サポーターからのレポート
8

高石市立高石中学校区
キャリア教育の視点を盛り込んだ小中連携の授業づくり

　高石中学校区はキャリア教育についての小中合同研修会を定期的に実施し、「めざす子ども像」の育成に向けて、小中連携してキャリア教育に取り組んでいる地域である。その取組みの一つに、小中の教職員が相互に出前授業を行い、小学校と中学校をつなぐ授業の実践がある。今年度は、中学校から小学校へ家庭科（キャリア教育の視点を盛り込んだ人生すごろくを活用）の授業、小学校から中学校へは、食育の授業をそれぞれ行っている。このように、小中の教員が連携しての、発達段階に応じた生きる力を育む教育の実践が、小学校から中学校への段差を緩やかにしていると考えられる。
　また、小中の子どもたちに同じ内容のキャリア発達に関するアンケートを実施し、中学校区で、教育活動の取組みを検証している。

教職員の声

- 人生すごろくは中三の家庭科授業でも実施したが、進路を考える上でも役に立ったという生徒の感想があり、小学生から中学生になるこの時期の児童にとっても卒業直前に自分の将来を考えるきっかけになればと思い、授業設定しました。

サポーターの支援例

- 小中学校の担当教職員との事前打ち合わせに加わる。
- 授業を企画・立案する際に、キャリア教育の視点を盛り込む。
- 取組み終了後、教職員間で情報共有し新年度につなぐ。
- キャリア教育について理解促進をねらいとする通信を発行。

サポーターの声

　キャリア教育の推進に計画的かつ継続的に取り組んでこられた成果が、着実に実を結んでいる校区だと感じました。

キャリア教育サポーターからのレポート 9

松原市立第五中学校区

全員でつくりあげた子ども像の継続・発展に向けた、検証・改善

松原第五中学校区では従来から、幼・小・中の教職員が一同に会する合同研修に取り組んでおり、平成23年度は、幼・小・中の教職員が一同に会する機会を学期ごとに作り、1学期には第五中学校区としての「めざす子ども像」（以下「子ども像」）を全体で作成、2学期には「子ども像」をもとに組み立てた授業を見学し、3学期には1年間の取組みの成果と課題を共有する場を設定した。「子ども像」作りを担当者だけで行うのはなく、全員で作り上げたことで、「自分たちで作ったんだ」という思いが生まれた。

「なぜキャリア教育が必要なのか」と問われることがあるが、将来の見通しを教職員どうしが共通して持つことで、今の取組みの位置づけを明確にし、そのときどきの発達段階に見合った教育を子どもに提供することができるというメリットがある。そうすることで限られた時間を最大限に活用することができ、結果的には子どもにも教職員にも安心感をもたらすという捉え方ができる。「キャリア教育の取組みは子どもにも教職員にもメリットがある。」ということが言える。

今後の課題としては、教職員どうしの更なるコミュニケーションの強化、今年度作りあげた「子ども像」をどういう形で継続発展させていくかということである。

教職員の声

- 統一したフォーマットで中学校区のキャリア教育の取組みをまとめることで、普段行っている取組みを俯瞰的に見ることができ、取組みの重要性を再認識するきっかけになります。

サポーターの支援例

- 学校区の取組みをキャリア教育の視点で取りまとめるための支援。

サポーターの声

学校の雰囲気がよく、地域の方々が常に出入りをして教職員の方々とコミュニケーションを交わしていることに、とても感動しました。

キャリア教育サポーターからのレポート 10

守口市立錦中学校区

キャリア教育を小中連携の視点で、より良く紡ぎ直す

一小一中の校区で、普段から教科学習や生徒指導等での連携があり、部活動や給食を通しての小中交流の取組み等も行われている。毎年夏には小中合同の研修等も行ってきた。

また、地域（学習）コーディネーターなどの協力を得ながら、小中それぞれで職場体験などのキャリア教育を実施している。人権教育に関しては、小学校、中学校でこれまで積み重ねた取組みが定着していた。このような個別の取組みを整理し、小中連携の視点でそれぞれの取組みの良さを組み合わせられるよう紡ぎ直すことで、小中9年間のキャリア教育の軸を通し、キャリア教育をより効果的に進められる道筋が明らかになった。

そこで、小中一貫のキャリア教育推進のために、次年度の小中合同研修において、小学校・中学校の教職員どうしが話し合い、中学校区としての共通の「めざす子ども像作り」を行う方針が立てられた。このように毎年夏に行われている小中合同研修等で校区の取組みを活用し、内容を見直すことで、現状に合ったより良いキャリア教育を継続することができる。

また、小学校では、新任教職員を対象とした研修の一つとして、「各学年のキャリアに関連する取組みの整理」を取り入れることを計画している。このようにすることで、キャリア教育の取組みの継承・改善につなげられると考えられる。

教職員の声

- 教職員どうしが、キャリアの視点で話す機会があると勉強になる。やるべき事が見えてくる。
- キャリア教育を、小中連携で取り組むために、まず、研修部会を年度内に開いて、来年度の研修計画を立てたい。

サポーターの支援例

- 学校の現状を、教職員へのインタビューや授業見学で把握。
- 研究事例発表の準備として、今までのキャリア教育に関する取組みを整理し、資料作成をサポート。
- キャリア教育の情報提供・提案。キャリア教育の事例紹介、研修等の案内。
- キャリア教育に関する情報共有をするための通信発行。

サポーターの声

「錦は、ひとつ」を合言葉に、先生方のチームワーク力を活かした、多彩な教育活動が印象的でした。今後も、児童生徒の「生きる力」に繋がる取組みを続けて頂きたいと思います。